契丹文字，女真文字及び西夏文字の関連性についての一考察

『長田夏樹論述集（下）』第 34 章
（中国北方古代文化国際学術研討会発表原稿，1993 年 8 月 13 日）

この論文は、①緒言、②契丹文字・西夏文字・女真文字、③「成吉思皇帝聖旨牌」裏面の 2 字について、④結語、からなる。

②は主に女真大小字の別に言及する。その中で、1972 年河北省承徳県で発見された所謂「契丹符牌」を女真小字とするのは、長田氏のこれまでの説の修正である。かつて長田夏樹「女真文字と現存史料」（1970，本書下冊第 17 章所収）において、表意文字主体の進士題名碑などを女真大字とし、表音文字主体と考えられる所謂「女真文字円鏡」を女真小字とした。この考え方自体は、金光平「從契丹大小字到女真大小字」（『内蒙古大学学報』1962/2）と同様であるが、金光平 1962 は具体的な女真小字資料を挙げない。長田 1970 は「女真文字円鏡」（『朝鮮金石総覧 上』の「女真字鏡」）を女真小字としたが、この円鏡は清格爾泰・劉鳳翥等『契丹小字研究』（中国社会科学出版社，1985）に契丹小字資料として掲載されることになるもので女真小字とするわけにはいかない。

本論文長田 2001（発表 1993）では、「女真文字円鏡」に替えて、1972 年に河北省承徳県で発見され鄭紹宗「承徳發現的契丹符牌」（『文物』1974/10）で紹介された所謂「契丹符牌」を女真小字とする。この符牌の文字は六つの要素から成っており、その文字要素は契丹文字と異なり女真文字と類似した部分があることから女真小字ではなかろうかとされている。この説は早くは顔華「女真文」（『中国民族古文字』天津古籍出版社，1987）にみえる。

③はこの論文の中心部分である。王易『燕北録』所載の契丹文字および所謂「成吉思皇帝聖旨牌」裏面の契丹文字を、契丹大字でも契丹小字でもない第三の契丹文字とする。この第三の契丹文字は契丹大字を簡略化したもので、西夏文字はこれを参考にして作られたとする。

この説の淵源は山下泰蔵「大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑」（『満蒙』16/10，1935）にある。山下氏は、「静安寺碑」の文字が『書史会要』所載の文字とも慶陵哀冊の文字とも異なることより、『書史会要』所載文字（＝『燕北録』所載文字）を契丹大字とし、慶陵哀冊を契丹小字とし、静安寺碑を先行の契丹文字を簡易にした第三の契丹文字とした。この契丹文字三種説を、長田 2001 は形を変えて受け継ぎ、静安寺碑などを契丹大字とし、慶陵哀冊などを契丹小字とし、『書史会要』所載文字（＝『燕北録』「成吉思皇帝聖旨牌」所載文

字）については契丹大字を簡略化した第三の契丹文字としたのである。

長田氏は、この第三の契丹文字を参照して西夏文字が作られたとし、これを“先西夏文字”とするわけであるが、この点については『書史会要』所載文字に類する資料が少なく何ともいえないのではなかろうか。（吉池孝一）